

“自分らしさ”を生かした未来へ——

未来館

NEWS

◎特集

チャレンジする女性

「エチオピアに緑を復活させたい」

～相馬からアフリカへ、環境問題に取り組む女性～



特集 チャレンジする女性

「エチオピアに緑を復活させたい」

～相馬からアフリカへ、環境問題に取り組む女性～

特定非営利活動法人フー太郎の森基金 理事長 新妻香織さん

30歳で会社を辞め、たった一人で5年間アフリカを旅し、そのアフリカに恩返しをするために木を植える活動を始めたという新妻香織さん。その思いや当時のエピソード、そして夢についてお話していただきました。

※「フー太郎の森基金」…アフリカで緑化と水資源開発を進めている団体。フー太郎というのは、94年に新妻さんがエチオピアで出会ったフクロウの名前で、森林破壊が進んでいるアフリカでは、フー太郎を帰すための森は3週間かけて探しても見つからなかったそうです。アフリカにフー太郎が帰る森を取り戻したいという思いで新妻さんが始めた活動です。

日本交通公社（現JTB）で月刊誌「旅」と「るぶ」の編集のお仕事をされていた新妻さんが会社を辞めたのはアフリカに行くためだったのですか？

どっちが先かと言われると、辞めると決めてからアフリカ行きを決めました。アフリカの5年間はおもしろかったですよ。私にとってはどうしても必要な5年間だったと思います。その5年間でアフリカの28カ国を旅するんです。ほとんど一人で、アフリカの横断と縦断を両方やりました。縦断は比較的簡単ですが、横断はあまりやってる人はいないでしょうね。

なぜアフリカだったのでしょうか。

私が会社を辞めてジャーナリストになりたいと思って、そのフィールドとして考えたのが中南米か中近東かアフリカでした。というのは遠くに行きたいと思ったのです。距離的にというよりは、精神的にも遠いところ。異質なところに身をおきたいと思いました。アジアはJTB時代にかなり旅行をしていたのでそんなに遠くなかったし、先進国には全然魅力を感じなかったんですね。でも中南米は90年頃テロがすごかったのであきらめてしまった。それから中近東に関しては、イスラム教の国ですので、女性はとてジャーナリストとして活動するのは無理だろうなど。それで消去法で（笑）、アフリカになったのです。

仕事を辞めて何か新しい違うことを始めるというのは非常に勇気がいることだと思いますが、何がそのようにさせたのでしょうか。

自分にとっては他の選択はなかったと思っています。

それくらい、雑誌の編集者としてクリエイティブな仕事を続けていくのに限界を感じていました。それは何かと言うと、当時いろいろな作家の人たちと仕事をしていたのですが、それがいい刺激になっていた。同世代の作家、例えば山田詠美さん、小林恭二さん、島田雅彦さん、俵万智さんが「20代作家の会」というのを作っていて、その取り巻きの同世代の編集者たちが一緒に遊びながら仕事にしていこうという仲間でした。彼らを見ていると、あの若さにして自分の価値観をしっかり持っていて自分の言葉を発している。それに比べて私のいる月刊誌の現場は、毎月毎月がアウトプットの連続で、忙

新妻 香織（にいつま かおり）さん

福島県富岡町生まれ。相馬市在住。1984年、日本交通公社（現JTB）入社、出版事業局で「旅」「るぶ」を編集する。1990年退社後、ケニアに移住しアフリカの28カ国を旅しながらライターとして活動を続ける。1996年、アフリカ横断記「楽園に帰ろう」でノンフィクションの文学賞「蓮如賞」優秀賞を受賞。1998年、「フー太郎の森基金」を創設する。日本では、環境保護団体「はげっ子倶楽部」「松川浦ガイドブック編集室」を立ち上げ、地元の環境問題にも取り組む。



しいからなかなかインプットができないわけです。大学時代は「学問」が面白くてものすごく勉強しましたが、大学までの知識でなんとか30歳までやれるだろうけど、もうこれ以上無理だなと、30歳以降は勝負できないって思ったんですよ。

それで自分の言葉を発せられる「核」というか、自分の宇宙をしっかり持ちたいと思いました。そうでないと私が思っているようなクリエイティブな仕事はもうできないだろうなという、危機感があったんですね。それなら自分の知らない世界に身を置いて、自分の価値観を築きたいと。私にとっては、非常にせっぱ詰まったものでした。

5年間のアフリカ生活で得たものは？

揺るがない自信ができるまでは帰らないと思っていました。どこにいても自分のスタイルで生きていける自信ですよ。よく言われるのは、「新妻さんみたいな仕事をしている人がよく片田舎の相馬市にいますね」って。編集の仕事に戻ろうと思えばできたと思うのですが、東京には戻らずに相馬に帰ってきました。その後も相馬に居続けたというのは、故郷が思いがけず居心地が良かったことと、どこにいても私に必要なものは全部自分に与えられるという自信があったからだと思います。

アフリカに行って何がかわりましたか？

アフリカに行く前の私は、話題のものはなんでも知っていたいというところがありました。それは一種の、編集者としての職業病だと思いますが。ベストセラーは読んでいたいし、話題の映画は見ていたいし、新聞も目を通してみたい。当時日本はバブルの全盛期で、私は仕事も遊びも人間関係も何もかも手一杯でアップアップしていました。手帳はいつもスケジュールで真っ黒で、そうでないとむしろ不安になる。だけど「何か狂っている、私はもっとシンプルに生きられるはずだ」と思うようになると、昨日までちょっと自堕落な夜を楽しんでいた東京が、とてつもなく醜く歪んで見えるようになった。だからアフリカに発った時はまったく身よりもなく、本当にトランク一つでした。

そんなところから私のアフリカの旅がスタートしていくのですが、やっぱり自分に必要なものはやってくる。自分が会うべき人にはちゃんと会うし、自分がやらなければいけないことはやっぱりやらされるし。だから焦ってあれをしなきゃ、これをしなきゃということがなくなりました。相馬にいても、隣の芝生が緑色でも気にならないというのかな。

自分の世界を確立したということでしょうか。

何が大切なのかということがよくわかったのだと思います。いろんなことをやる必要は全然なくて、自分にとって何が本当に大切なのかというのがわかってきた。それは自分が大事にしている思いだとか、愛する家族だとか、私がなんとしても守らなければならないもの。東京とちがって、田舎では時間も空間もたっぷりとれます。その中で、自分がやらなければいけないことはちゃんと与えられるし、会わなければいけない人にはどうしても会わされるし。今はメールもインターネットも全世界がつながっているから、田舎であろうと東京であろうとあまり関係なくなっているでしょうがね。たとえどこにいても私は私として何かをやっていく、何かを形作っていくということを選んだのはアフリカにいたからだと思うですよ。非常にシンプルに物が見られるようになりました。

男女平等に関してはどのように考えていますか？

私が入社した時は、もう男女雇用機会均等法が施行された後でした。だから私の中にはあまり、男だ女だという意識はありません。それは私たちの前の世代の方たちが一生懸命闘ってくれたおかげだと思います。JTBも私の前の年までは男女で差があったようですが、私の時は男女関係なく、むしろ試験的になんでもやらされました。そういう意味で女性の地位を闘って勝ち取ったという意識はないし、私自身は男だから女だからという意識も全くありません。仕事ができる人もできない人も、男も女もいるし。また会社はそれだけで回っているわけではない。それと、うちは両親がともに教師だったので、兄とも性差なく育てられた。実はずうの夫は、私よりずっと平等意識が強いので驚きますよ。

アフリカの話に戻りますが、女性が一人で旅をしていると、やっぱり怖いことや女性であるために苦労したこともあったのではないかと思います。

スーダンとかエジプトとか、イスラム教の国にいくと、「キミは男なのか女なのか」という質問を警官とか役人にはよくされましたね。それはなぜかという、女が一人で旅をするというのが彼らには考えられないからです。それで女だってわかった次の瞬間、「アイラブユー」ってくるんです。要するにベールをかぶってないような女は彼らにとっては家畜同然なんですよ。時々体当たりで来られることもあったけど(笑)。

しかしどちらかというと、アフリカでの一人旅では、女だからこそ助けられたことのほうが多かったように思います。アフリカの人たちは、男尊女卑というけど、裏返せば女性はいたわらなければいけない生き物と思っているのですよ。だから

どこに行っても優しくしてもらいましたよ。

日本に帰ってからフー太郎の森基金を始めますが、それは何かきっかけがあったのですか？

エチオピアでフクロウのフー太郎に会ったのは94年で、フー太郎の森基金ができたのは98年です。かなり間がありますね。というのは、始めから環境問題に対しても、NGO活動にも関心があったわけではないのです。ただ、5年間のアフリカの旅で、とてもアフリカにお世話になったのです。宿のないところでは、村長さんが自分の家に招いてくれて、少ない食べ物をわけてくれたり、2週間もお金もとらずに家においでくださる肝っ玉母さんがいたりしました。アフリカから帰ってきて、アフリカ横断記を書いて賞をもらうのですが、その作品だってアフリカの大地と、アフリカで私と関わってくださった人々の物語なわけで、アフリカの人たちとの共同作品なのです。いいことも悪いこともありますけど。例えばナイジェリアで、カメルーンのスパイだと疑われて留置所に3週間もぶち込まれたこともありました。そういうこと全部ひっくるめて物語になっていくんですよ。だから、アフリカのために何かしたいと思っていた時に私の友人から、ソマリアでプロジェクトをやりたいという日本人がケニアにいますので、そのための資金集めをやってくれないかという話が舞い込みました。お金を集めるだけならできそうかなと思って、それでフー太郎の森基金を作ったんです。

ということは、フー太郎の森基金というのは最初はソマリアでプロジェクトをやるための資金集めだったのですね。それが、どうしてエチオピアで木を植えるという活動にかわったのでしょうか。

はい。ただ、「フー太郎の森基金」という名前をつけたように、エチオピアでいじめられていたフクロウを森に帰そうと森のなくなった大地を3週間さまよった。その経験から、エチオピアに1本でも木を植えたいという願いはずっとありました。それでソマリアが落ち着いたらいずれエチオピアに木を植えたいと、その人と話していたんです。

とはいうものの、最初は年間300万円必要だというお金をどうしようと思いました。しかし300万円というのは、3000人の人から1000円をいただければいいのだと思ったら、何かできそうな気がしました。それで私の本の読者で私の講演会を誘致してくれる人が全国にいたので、そういう人を中心にキャンペーンを始め、全国を45日間で41カ所講演をして歩きました。そうして350万円を集め、それをもってケニアに飛びました。すると、そこでケニアの友人たちがソマリアのプロジェクトをやる日本人を怪しいと言い出したんです。「お金、だまされなくてよかったね」と。愕然としました。アフリカでプロジェクトをやるからお金をくだ

さいといって歩いたのにそのご当人が逃げ回っていて現れないんです。それに加えてソマリアの情勢は最悪の状態になっていました。赤十字の看護師でさえ殺されているという状況で、ソマリア行きは絶望的だというのがわかった。このまま日本にも帰れないし、じゃあ、エチオピアに木を植えたいと夢を語っていたので、その調査に行こうということでエチオピアに入ったんです。

ところがエチオピアに行ったら、そこはたいへんな国だということがわかりました。政府の許可をもらうのに7年も8年もかかると。それでも打ちひしがれながらも仲間探しを始めるのですが、厳しい審査を経てこの国に入ってきている団体は国連からお金をもらっているような団体ばかりで、私たちの350万円なんてただの寄付金。私たちの思いは伝わりません。それで、途方にくれてフー太郎に出会ったラリベラに行くんです。

5年前に1週間だけ滞在していたので、私のことなんか誰も覚えていないだろうと思っていたら、なんと村を歩いていると、私に向かって村人が「ググツ、ググツ」("フクロウさん")って言うんです。そして「みんな、きみのこと覚えてるよ」と言うんですよ。また様々な感動的な再開劇もあり、ここラリベラに木を植えたいと強く思うのです。そしてついにラリベラ高校の校長先生と出会うのです。彼は1本でもいいから木を植えたいという私の話を聞くと「わかりました。一緒にやりましょう」と、学校の土地もあげるので、そこで苗木を育てて木を植えましょうと言ってくれたんです。本当は7年も8年もかかるところをわずか2週間にして私たちは仲間を、そして畑を得たのです。

ラリベラでは具体的にどんな活動をなされているのでしょうか？

ラリベラに事務所を開業してから9年が経ちましたが、私たちの活動は驚くほど発展しました。日本人駐在員がラリベラに住み着いて現地の人たちと活動を進めているのですが、それも今では4代目になりました。私たちがラリベラでやっていることは、緑化と水資源開発です。しかも「教育」と「実践」ということを大切にしています。なぜかというと、人々が森の大切さ、なぜ木を植えなければならないのかを理解しなければ、また切られてしまって終わりなのです。それからこれは援助の鉄則だと思うのですが、「魚をあげるのではなく魚のとり方を教える」、これをしていかなければ、彼らは何も変わっていかないのです。そこで学校の中に環境クラブを作り、毎年1000名を越える子どもたちと一緒に種から苗木を作り植林をしています。そうしてこれまで30万本の木を植えてきました。4年前、それらの木がどれだけ根付いているか調査したことがありました。すると結果は32%。ショックでした。植えても7割が枯れてしまっていたのです。エチオピアの事情をよく知る方は、標高2600メートルで、半年雨が降らず、しかも痩せた

土地での植林、「よく健闘しているよ」と言ってくださった。しかし諦め切れませんでした。それからスタッフとともにいろんなことを試みました。17種類ほどの木を植え、ラリベラに適した樹種を選定したり、堆肥を作ったり、週1度水やりをしたり、何万個もマイクロキャッチメント(苗木を石で囲って少ない水で木が育っていく工夫)を作ったり、直播を試みたり。その結果現在は62%まで生存率が上がりました。

私たちは水問題を根本的なところから解決するために木を植え始めましたが、木が育って水を蓄えるまでは長い時間がかかります。そこで直接水の事業にも乗り出しました。現在ラリベラは3日に1度1~2時間水が供給されます。しかし乾季になると1週間も水がなくなる。しかも世界遺産を目的に年間数万人やってくる旅行者と水を分け合う暮らしです。彼らが1日何リットルの水が使えるか試算したところ、1日わずか8~12リットルとわかりました。これは日本で1回水洗トイレを流すときに使われる水に匹敵します。

そこで学校に水タンクを設置したのを皮切りに、3年前から雨水を貯める溜池を8つ住民と一緒に造りました。これにより乾季に入ってから3~4ヶ月人々は水が使えるようになりました。来年からは新たな水源から水を汲み上げる事業にも着手する予定です。

10年前、私がフー太郎の森基金を作った時には、このような展開は夢にだに思いませんでした。しかし村に入って活動を行うにつれ、村の抱える問題を見過ごすことができず、どんどん活動が発展していきました。まったく植林のプロでもなければ、NGOなど何も知らなかったただのライターの私が、溜池の設計図を書いていたりする(笑)。

神様というのは越えられないハードルはくだらないんだって私はいつも思うんですね。最初からNGOをやれと言われてたら私は絶対にやらなかったと思います。小出しにされた試練を一つずつクリアしていったというか、導かれてやってきたという感じです。

植林する子どもたち



何か問題に直面したりしたとき、どういう気持ちで乗り越えてきたのですか？

壁に直面したとき、まず神様は越えられないハードルを私にくださるはずがない、これは私が越えられる試練であると考えようとしています。自分に都合の悪いことが起きた時はなぜこれが起きているのか、何を学ぶためにこの事件が私のところにやってきたのかと、自分の内側に答えを求めます。ナイジェリアで留置された時もそうでしたが、何でこの状況を自分が招いたのかを必死に考えました。その時に自分が得た答えは「怒り」でした。私の怒りが自分を窮地に追い込んでしまったと気が付くんですよ。

留置されるという壮絶な体験をしている時でさえも、そのことを意味を考えるわけですね。

そのほうが私にとっては早道なんです。不思議なことに、自分が学ぶべきことを学ぶと、状況は変わるんですよ。私の話を聞いているとちょっと不思議だなと思うかもしれませんが、アフリカで学んだことの一つは「他力」ということです。それまでの私は、今の自分があるのは自分の汗と努力の賜だと思っていました。そういう生意気な人間でした。でも、死ぬような事故にあっても全く無傷だったり、奇跡のようなことが何度も何度も起きて、生きてるんじゃないかと生かされているということを徹底的に身をもって体験させられるんです。アフリカで私が得た一番大きなものは、自分が「生かされていた」ということを知ったことですね。「他力」ということ。

それでね、やっぱり「自力」でいると頑張っていないと自分がダメになっちゃうような気がするんですよ。だから肩に力を入れて、頑張っていたのだと思います。だけど生かされているということがわかった時、肩にかかっていた力がすうーっと抜けちゃって、ぼろぼろと泣きましたね。それは複雑な涙だったと思う。自分がいかに無力だったかを知らされた悔し涙であったり、生意気だった自分に対する懺悔の涙だったり、それでもこんな私を守ってくださるものがあつたことへの感謝の涙であったり。以来、お任せできるようになったと言ったらいいのだろうか。やっと楽に息ができるようになりました。

新妻さんの、活動の原動力は何でしょうか？

自分の描いたビジョンが形になっていくことです。例えば、アフリカに1本でも木を植えたいと思って始めて、そこに30万本の木が植えられていったり、公園が4ヶ所できていったり、学校が作られていったり、大きな溜池が8個造成されたり。私が描いていたビジョンが年を経るごとに形になっていくんです。やっぱりうれしいことですよ。地元相馬市の松川浦でも活動していますが、いろんな思惑があまりにも複雑に

絡み合っただけで日本は進みませんね。まったく不思議です。エチオピアの活動地は世界遺産に登録されているので、世界中から旅行者がやってきて、私たちの活動を見て共感し、いろんな人たちが活動に協力してくれています。アイルランド人の庭師、フランス人の活動家など、毎年リベラにやってきて私たちのプロジェクトに参加しています。

一つのことをボランティアで10年間やり続けるというのは、とても大変なことですよ。

そうですね。でもやっぱり10年くらいやらないと何もわからないかもしれない。自分のライフワークだと思っているから焦る必要もないし。何年までに何をしなければならぬというものじゃないでしょ。ライフワークだから死ぬまでやればいい。こうあらねばならないというのもあまりないしね。でも、やりたいことに対して努力がないということではないのですよ。自分がやろうと思っていることでたとえ苦勞しても、それはあまり苦にならない。私は国文科しか出ていないけど、必死で溜池の設計図や計画書を書く。みんなそうですよね。やりたくないことをやってる時は時間がものすごく長く感じるけれど、好きなことをやってる時は時間なんて忘れちゃう。

あとは家族に感謝ですね。エチオピアに毎年一ヶ月間も行って来ますと言われて黙って行かせてくれる夫って、よほどできた人でしょうね。それ以外にもたびたび長期で家を留守にする。おまけに帰ってくると家がキレイになっていたりして、「あー、キレイな家に帰ってくるのは気持ちがいいなあ」なんて冗談いいながら、ものすごく感謝しています。夫には非常に支えられています。

環境ノートを手渡す新妻さん



これから何かにチャレンジしようとしている若い世代にメッセージをお願いします。

やりたいことをやるべきですよ。楽しくなくちゃ人生じゃないしね。やっぱり「やろうかな」「やりたい」ではなく、「やって

しまう」ことだと思いますね。そうするとベクトルが変わるんですよ。不思議ですが状況ががらっと変わりますよ。その自分の気持ち次第でね。決めるのはやっぱり自分だと思っただけですよ。だれかが背中を押してくれるのを待ってるようではやっぱりダメで、やろうかなと思ったら本当にやりたいと思ったら、やってしまうということです。

よく私は「不注意な一歩のすすめ」と言っていますが、とにかくNGOを作ってしまったのもどう考えても不注意としか思えません。フー太郎の森基金というのは、お金を集めるだけのはずが、どうしてNGOになっちゃったのという感じ。だから不注意でもいいから「やりたい」は一歩踏み出してしまうことです。そうすると、不思議ですけど人間関係も環境も何もかも変わりますよ。そういうミラクルを何度も私は経験しました。強い意思があれば状況というのは本当に開けますよ。それまでは温めていてもいいと思います。「何やってんのかな」って思いながら一つ一つジグソーパズルのピースを集めていけば、「ああ、これだったんだ。私が描こうと思っていた絵は」という日がきっと来るから。みんなそうだと思います。みんな役割を持って生まれてきてると思います。男だからとか女だからとかいうのは、あまり考えなくてもね。

最後に新妻さんの夢を教えてください。

今のエチオピアの状況は地球の未来だと思うのです。国土の4%しか森がなく、渇き、人々が飢えている。つまり、木のない大地は水がなく、雨が降れば水が蓄えられず洪水になってしまう。それだけではなく、雨と一緒に肥えた土も流れ出して畑が作れなくなる。エチオピアでは年間10億トンもの土壌が流出していると言われてます。乾季に干上がった川の川床を掘り、にじみ出てくる泥水をすくう人々を見た時、森を失うということはフー太郎のような小動物が生きていけなくなるだけではなく、われわれ人間も生きていけなくなるのだと知りました。今、地球の気候が大きく変動していて、皆さんも何かおかしいと薄々気づいているのではないのでしょうか。地球はもう陸地の4分の1が砂漠化しているのです。まさにエチオピアの干からびた景色はこれから私たちが迎えるであろう地球の姿なのかもしれません。エチオピアは人類の発祥の地といわれています。そこが水と緑で再び潤ったら、あんなに荒廃した土地が復活したら、もしかしたら力をなくした地球全体が復活できるかもしれないと、地道な活動をエチオピアの人々と続けています。私たちがエチオピアに根付かせた木も、満々と水をたたえる溜池も、「希望」だと思うのです。「希望を植える」。それが私の夢です。

Father's Challenge!

お父さんの チャレンジ!

—男性の育児休職体験談—

福島県次世代育成支援企業認証制度において、平成18年度「仕事と生活の調和」推進企業として認証を受けた、富士通アイソテック株式会社に勤務し、育児休職制度を利用した二人の男性社員をご紹介します。

【会社データ】

○富士通アイソテック株式会社

資本金:15億円

従業員数:775名(うち女性約350名) / 3月20日現在

本社住所:伊達市保原町字東野崎135番地

事業内容:デスクトップパソコンの製造、PCサーバの製造、プリンタの開発・製造・販売、個人向けパソコンの修理、工機事業、ITスクール事業、リサイクル事業(エフアイティフロンティア)

【育児取得者プロフィール】

○佐藤 繁さん

職務内容:製造統括部生産部パソコン生産課長として、主にパソコン関連製品の生産・管理業務を担当

育児休職取得期間:2005年12月から約1か月間

年齢:現在44歳

家族構成:妻、子1人

○高橋 秀男さん

職務内容:製造統括部生産部パソコン生産課に勤務し、主にパソコン関連製品の生産・管理業務を担当

育児休職取得期間:2007年1月から約1か月間

年齢:現在42歳

家族構成:妻、子5人

—育児休職を取得するに至った経緯、当時の家族の状況等をお聞かせください。

佐藤さん(以下敬称略):子どもが生後12か月に入り、育休を取っていた妻の職場復帰が一番の理由です。夫婦共働きで、もともと家事は分担していました。妻が育休中で自宅にいる状況であっても、家事や育児をすべて妻に任せてしまうのではなく、自分も出来る限り関わっていました。新しいことをしてみたい、もっと育児に関わりたいという気持ちと、当社ではまだ育休を取得した男性社員はおりませんでしたので、その最初の一人になってみたかったというのも、理由の一つですね。(笑)

高橋さん(以下敬称略):子どもが生まれてすぐの約1か月の期間、育休を取得しました。私にとっては5番目の子どもでしたが、これまで家事や子育てに関しては、専業主婦の妻に任せきりで



した。育休を取得しようと思ったのは、産後の妻の身体のことを考え、少しでもサポート出来ればとの思いです。前例を作ってくれた佐藤課長の存在が大きいですね。私の相談に、「会社が支援するから心配しないで」との心強い言葉をいただきました。**佐藤:**私の場合も、上司の理解と会社のバックアップにより実現したことです。私も高橋さんには制度の利用を強く勧めました。

—育児休職を取得したことに対する家族や周囲の反応は?

佐藤:会社の後押しはとにかく大きかったですね。はじめ、育休の期間を半年間くらい取得するつもりでおりましたので、妻は、もう少し休みを取って欲しいと思っていたかもしれません。ご近所の方や、子どもの健診などでは、ほかのお母さん方と情報交換をして、仲良くなることができました。それ以外は特にこれといって大きな変化はなかったように思います。

高橋:私の場合、会社の外で「会社を休んで大丈夫なのか?」と疑問視されたことがありました。育休を取得することになって、上司から声を掛けられたり、安産のお守りをいただいたり、会社全体で応援してくれる気持ちがうれしかったですね。

—お二人ともご両親とは別居で、直接的にはサポートを受けずに子育てをしていらっしゃいます。育児休職中に大変だったと感じたことはありますか?

高橋:私にとっては、すべてです。初めてみそ汁を作ったときには、だしを入れるの知らなくて、子どもたちから味が変だと(笑)。家事も育児についても、妻の大変さがわかり、あらためて、感謝の気持ちが湧いてきました。私の作った、決して美味しいとは言えないような食事を、子ども達が文句も言わずに食べてくれたことがうれしかったですね。妻の話では、子どもたちは味よりも父親の一所懸命さに何も言えなくなったとのことでした。

佐藤:家事にしても子育てにしても、一通りのことは経験しておりましたが、妻が日々していたことを、私も“当たり前のこと”として“毎日”することの大変さをあらためて感じました。私は、育児日記「お父さんノート」(本人命名)を書いて、帰宅した妻に一日の様子を伝えていたのですが、子どもの成長とともに、家事や育児の方法に日々工夫する自分なりの成長も認められ、充実感がありました。誰よりも先に子どもの成長の一場面立ち会えたことは、何にも代え難い喜びです。

—休職期間中や復職時の会社のバックアップ体制について、どのように感じましたか?

佐藤:休職期間中の休職者の業務は、上司のサポートと課全体で分担することにより、私の場合も特に大きな問題もなく、職場復帰もスムーズでした。私が休業したのは課の業務が忙しい

時期だったので、会社から何らかの仕事の問い合わせがあるものと思っていましたが、そのような電話は一度もかかってくることはなく、逆に少し寂しい気持ちでした(笑)。会社としては、「休職者がいることで会社が回らないことのないよう、会社は個人ではなく組織で動かすもの。」との考えから、はじめから、連絡する気はなかったようですね。お互い様の気持ちですから、高橋さんの育休取得期間中も、残っている課の全員で仕事を分担し、対応しました。

高橋: お陰で、全く会社から離れ、家庭のことに専念できました。会社から「育児休業の延長も可能」との話がありましたが、逆に会社が恋しくなりましね。休職期間終了後は、休職前と同じ職場に復職する体制になっているのも、安心して休職できた理由の一つです。

一 育児休職制度を利用して、仕事や家庭に関して考え方に変化はありましたか?

高橋: 子育ては、母親だけでなく夫婦が協力してすべきとの認識を持ちました。育児休職を取得してからは、家族のことにより気持ちが向くようになりました。効率よく仕事をこなして、勤務終了後は早く帰宅しようとするようになりましたね。周囲にも自分の体験を話して、ぜひ、育児休職を取得するよう勧めたいと思います。

佐藤: 自分の考えは、それほど変わっていないと思います。「家事や育児」と「仕事」は、夫婦のどちらか一方だけがしなければならないものでも、必ず等しく分担しなければならないものでもな

く、それぞれの考えで夫婦が最適だと思える選択ができることが望ましい。社会がそうあるべきと、決めつけてしまうことのないように気を付けなければなりません。育児休職にしても、それを可能にする会社の理解、制度の整備が必要です。休職期間中の経済的な保障といった問題もあるでしょう。最適な選択ができるような環境作りが大事ですね。

これからも、男性社員の対象者には制度を利用するよう、積極的に声をかけていきたいと思います。

育児の体験談を、ときにユーモアを交えてお話くださったお二人ですが、「仕事や家庭を離れて自分を取り戻す時間」について尋ねたところ...「釣りが趣味でしたが、最近は子どもたちを連れて出かけるようになりました。(高橋)」「私は社会人チームでサッカーをしています。私だけでなく妻も『自分のための時間』が持てるように、日頃から、家事や育児を分担することを心がけています。(佐藤)」とのこと。これからも、明るいご家庭を築かれることと思います。ありがとうございました。



高橋さん(左)と佐藤さん(右)

富士通アイソテック株式会社におけるワーク・ライフ・バランスのための取り組みについて、ビジネス推進統括部総務部総務課亀井亜紀子さんから話を伺いました。

当社では、まず、2004年に労使プロジェクトを設置しました。そして、従業員が仕事と子育てを両立させることができ、従業員全員が働きやすい環境をつくることによって、すべての従業員がその能力を十分に発揮できるようにするために、6つの目標を掲げた行動計画を2005年4月に策定し、それに基づいてこれまで取り組んできました。

一つには、性別に関わりなく育児休職を希望した従業員が取得しやすい環境を整備する一環として、ガイドブックを作成、配付し、社内制度について従業員に周知するとともに、ホームページへ掲載し社外にも広報することによって、従業員の意識の改革をはかりました。あわせて、産前産後休暇、育児休職取得中の従業員の業務について、誰もが対応することができるよう、職場全体が多能工化を推進するための検討を重ね、実施しました。

従業員の健康に配慮した社内環境の整備をすすめ、女性の身体や妊娠した従業員に配慮した職場環境の整備のため、社内設備の改修も行っています。また、復職時・復職後の支援のため、産前産後休暇や育児休職をした従業員と所属長との面談を実施しています。

経済的な側面からの育児支援として、ファミリーアシスト給付制度を新設しました。家族手当の見直しを図るとともに、出産費用の補助として、従業員または扶養する配偶者の出産に対し、健康保険とは別に会社独自の制度として、出産育児一時金30万円が支給されます。

働き方の見直しにつながる取り組みとして、最大20日まで積み立てることができる積立休暇や年次休暇の半日取得の利用を推進しています。積立休暇の利用目的として、看護やボランティア活動のほかには2006年度からは不妊治療も該当するようになりました。また、男性の育児休職推進として、積立休暇の残日数の範囲(最長1か月)で有給とすることができる制度を新設しました。介護休職の制度もあり、同一対象家族につき通算して1年の期間で取得することができます。

子育ての社会的支援として、従業員には地域行事への参加をすすめ、当社はボランティア活動、学校教育との連携、パソコン組み立て教室の開催やファミリーフェスティバルの地域開放なども行っています。

このように、当社は諸制度を整備し、仕事と家庭生活が両立できる職場環境づくりに努めてきました。今後の課題は、まだ十分でない制度を充実させ、また、制度を利用しやすい会社風土をつくっていくことです。

パワーハラスメントやセクシュアルハラスメントの相談窓口「ヘルプライン」を設けていますが、今後相談窓口がより機能するような運営を検討しています。製造部門で女性のラインリーダーは育っていましたが、まだ、女性の管理職はおりませんので、ポジティブアクションも念頭に置いた取り組みも検討する必要があるでしょう。社内の人権専門委員会を設置し、現在、アンケート調査を実施しています。アンケートは集計結果を分析して制度の見直しに生かし、従業員にフィードバックしていきたいと考えています。

今後も仕事と家庭生活が両立できる職場環境づくりに努め、仕事のやりがいにつながりやすいような諸制度の整備を行っていきたくと考えています。

「女性リーダーコース」派遣者紹介

地域や団体で積極的に活動できる国際的視野を持った女性リーダーの育成のため、国際女性教育振興会が企画する海外研修に、県内の女性を派遣します。

コースの概要

- スイスコース:10月25日～11月1日 8日間
・視察テーマ: 教育
- オーストラリアコース:10月30日～11月6日 8日間
・視察テーマ: 福祉

内容: ①意気込み
②帰国後どんな活動をしたいか

スイスコース

瀬戸 沙代子(せと さよこ)さん

- ①事前に日本の教育や男女共生への取り組み、地域での活動を勉強し、スイスとの比較をしたい。
- ②海外研修で得た知識と経験を文書や発表会で皆様にお知らせしたい。また、教育や人権の問題を若い世代の方にも興味を持ってもらえるよう、分かりやすく発信したい。

橋本 ミツ子(はしもと みつこ)さん

- ①個々人の能力をのばすために、学校・家庭・地域がどのように関わって青少年を育てようとしているのか、しっかり見てきたい。
- ②事後の報告・発表会の他に、特に地域で教育関係の方々に報告したい。

寺脇 カツ(てらわき かつ)さん

- ①スイスの軍隊の現状を視察してみたい。そして日本と比較してみる。
教育の現場では教育委員会がどのように関わっているか調べたい。
- ②小学校の保護者、地域の方々へ報告会を開きたい。



(上段左より) 増子さん、寺脇さん
(下段左より) 瀬戸さん、橋本さん

オーストラリアコース

高木 勝代(たかぎ かつよ)さん

- ①福祉の先進国といわれているオーストラリアで、高齢者へのケアがどのように行われているのか研修してきたい。
- ②地域の高齢者が在宅で人生の最後を終えられるようなボランティア活動に尽力したい。

増子 麻裕美(ましこ まゆみ)さん

- ①女性が働きやすい環境というのはどういう事なのか体感してきたい。そして、あちらで福祉に携わって働いている方の表情を見てきたい。
- ②自分の職場でまず、報告を行いたい。

オトコの生き方はたらき方見直し企画募集事業 選考結果

平成19年度に実施する活動の企画を募集したところ、県内の団体から6件のご応募をいただき、選考委員による厳正な審査の結果、以下の3件の企画を採用することとしました。

| 事業名 | 応募者 | 事業の概要 |
|---|--------------------|--|
| スローライフな生き方・働き方講座 | 瀧田 勉 | スローライフな生き方をハープを通して学び、これまでの男性の生き方や働き方を見直すきっかけとする。 |
| 実践! オトコのコミュニケーション・ワークショップ | 特定非営利活動法人 ビーンズふくしま | 性別役割分業が暗黙の了解になっていて、オープンに言語化されていないということが、男女共同参画社会の実現の障害になっている。そこで、本事業ではコミュニケーションという見地から、今まで「暗黙」であった前提そのものにスポットをあて、男性に新たな「気づき」と「変化」を促していく。 |
| ふくしま「おとこの寺子屋」～男性問題を考える連続公開講座とミニワークショップ～(仮題) | おとこプロジェクト | 男女共同参画に積極的に「家庭で」「地域で」「職場で」取り組む男性を増やすには、男性自らが男女共同参画について考えることが求められている。そこで、継続型・参画型の男性主体の講座を開催し、男女共同参画に理解のある男性を増やしていく。 |

コーチング入門講座

コーチングとは、その人がその人の夢や目標に向かい、自らの力で行動できるように支援するコミュニケーションの技術です。

参加されたみなさんは、講師の講義や演習を通して、相手の考えを尊重する質問を使い、相手に自ら選択してもらうための基礎的な方法の習得を目指し、真剣に、そして楽しく取り組んでいらっしゃいました。

日時：第1回 平成19年6月9日(土)、10日(日)
第2回 平成19年8月11日(土)、12日(日)
いずれも 10:00～15:00

講師：

アズ・コミュニケーション代表 前田 文さん

受講者：第1回 17名 第2回 20名

※今後の予定については、P10をご覧ください。



受講者の声

- 会社を定年退職し、これからの人生をどう生きていくか？悩んでいましたが、人生に生きがいをもてるようになりました。
- 実生活ですぐに使えるノウハウなので、面白かったです。あつという間に時間がすぎてしまいました。
- コーチングが前向きな方法に向かう取り組みだということがわかりました。

未来館パソコン講座

当センターのOA実習室(4階)において、パソコン講座(有料)を実施しました。

今回は、表計算ソフト「エクセル2003」を使用して、関数やエクセルの便利な機能について学んだ2日間コース(20名参加:6月23日、24日)とこれからパソコンをはじめ

める方を対象とした1日コース(17名参加:6月27日)の2つのコースで、参加された皆さんは熱心にパソコンに向っていました。

今後の開催予定については、P10をご覧ください。

未来館ボランティアスタートアップ講座

当センターでボランティアに登録し、活動していただくための講座を実施しました。

ボランティア随時募集中

登録ボランティア(15歳以上の福島県民で、無償で活動していただける方)を随時募集しております。

活動していただく内容は、保育、環境美化、新聞クリッピング、センター情報誌作成、イベント等があります。

詳しくは、企画調査課(0243-23-8303)へ。

日時：2007年7月1日(日) 13:00～16:30

内容：

講義「施設でボランティア活動をするために」
福島県社会福祉協議会 齋藤奈緒さん

体験スピーチ「未来館でボランティア！」
未来館ボランティア 田崎由子さん

ワークショップ「『ジェンダー』って、なんだ？」
未来館ボランティア活動の概要説明と施設見学

●●●平成19年度 イベントスケジュール ●●●

| 開催時期 | | 事業名 | 内容 |
|------|-------------|------------------------------|--|
| 9月 | 9/8、9 | 未来館フェスティバル | 全館あげての県民参加イベント シンボルイベントとして「林文子氏講演会」を8日に実施 |
| | 9/27 | これからはじめるパソコン講座 (第3回1日コース) | 個人のスキルアップを図るためのパソコン講座 キーボード操作編(定員:15名 受講料:3,000円) |
| | 9/29~30 | コーチング入門講座 | コミュニケーション能力の向上と自己実現のための手法を習得する講座 (定員:20名 受講料:5,000円) |
| 10月 | 10/2~11/7 | 女性就業援助技術講習会 (会津若松市) | 再就職等、就業を希望する女性や、経済的に自立を目指す女性への技術習得を支援するパソコン講習会(定員:20名 受講料:15,000円) |
| | 10/11~11/21 | 女性就業援助技術講習会 (いわき市) | 再就職等、就業を希望する女性や、経済的に自立を目指す女性への技術習得を支援するパソコン講習会(定員:20名 受講料:15,000円) |
| | 10/13、14 | 未来館パソコン講座 (第3回2日コース) | 個人のスキルアップを図るためのパソコン講座 ワード基礎コース(定員:25名 受講料:5,000円) |
| | 10/31 | 男女共生講演会 | 精神科医、大学教授として活躍する「香山リカ」先生をお招きしての講演会 |
| 11月 | 11/14 | これからはじめるパソコン講座 (第4回1日コース) | 個人のスキルアップを図るためのパソコン講座 シニア向け基礎講座(定員:15名 受講料:3,000円) |
| | 11/17、18 | これからはじめるパソコン講座 (特別編) | 個人のスキルアップを図るためのパソコン講座 特別編として「年賀状をつくろう」をテーマに実施 |
| | 未定 | 第2回未来館トークサロン | 館長と地域住民とが、男女共同参画に関して日ごろ疑問に思っていることなどを自由な雰囲気でお話し合う懇談会 |
| | 下旬 | 第2回未来館シネマ倶楽部 | 上映作品「筆子・その愛-天使のピアノ-」 |
| 12月 | 12/1、2 | 第1回男女共同参画専門講座 | 基礎講座を修了した受講生を対象に、ゼミ形式で男女共同参画社会実現に向けての課題に関する専門的な講座 |
| | 12/8、9 | 第2回男女共同参画専門講座 | 基礎講座を修了した受講生を対象に、ゼミ形式で男女共同参画社会実現に向けての課題に関する専門的な講座 |
| | 12/8、9 | 未来館パソコン講座 (第4回2日コース) | 個人のスキルアップを図るためのパソコン講座 ワード活用コース(定員:25名 受講料:5,000円) |
| | 12/16 | 公募研究報告会 | 平成17、18年度の2ヶ年間にわたり委託した研究成果の報告会 「学校教育におけるジェンダー平等戦略」 |
| 1月 | 1/19、20 | 第1回未来塾 | 「21世紀を担うリーダー」をテーマに、県内企業のトップ等による講義を通して、地域における男女共同参画社会を積極的に推進する中心となる人材を育てる連続講座 |
| | 1/26、27 | 第2回未来塾 | 「21世紀を担うリーダー」をテーマに、県内企業のトップ等による講義を通して、地域における男女共同参画社会を積極的に推進する中心となる人材を育てる連続講座 |
| | 未定 | 第3回未来館シネマ倶楽部 | 「人の生き方」や「生きる意味」をテーマとした映画の上映等 |
| 2月 | 2/2、3 | 未来館パソコン講座 (第5回2日コース) | 個人のスキルアップを図るためのパソコン講座 エクセル活用コース(定員:25名 受講料:5,000円) |
| | 2/14~3/12 | 女性就業援助技術講習会 (郡山市) | 再就職等、就業を希望する女性や、経済的に自立を目指す女性への技術習得を支援するパソコン講習会(定員:20名 受講料:15,000円) |
| 3月 | 3月中旬 | インターナショナルな事業 | 各国の現状と課題、日本との違い等について、各国大使館職員等によるパネルディスカッション等を実施 |

未来館フェスティバル 「大参画祭」開催迫る!

今年はテーマを「未来館大参画祭」と銘打ちまして、全館をあげて皆様のお越しをお待ちしています。9月8日(土)・9日(日)は、どうぞ未来館へお出かけください!

9月8日

☆シンボルイベント☆13:15~15:45

林 文子さん(株式会社ダイエー取締役副会長) 講演&トーク
定員:350名(申込要、先着順)

- 安達高校プラスバンド ミニコンサート 12:00~
- グランドオープン 13:15~
「剣舞・二本松少年隊」 二本松北小学校のみなさんがグランドオープンを盛り上げます。
「福島県知事あいさつ」
- 未来館ボランティア企画 10:00~ トーク&トーク&トーク
「△○で□…男女で参画し、丸く **地域** を創る」



9月9日

- アトラクション 12:00~13:00 当センターで活動して下さっているグループの発表会
「日舞」:藤陰流寿満会 「バレエ」:松本憲子・麻希バレエダンススタジオ 「フラダンス」:ブルメリア
- ふれあい動物園 10:00~ ポニーにのったり、うさぎにさわったりしたいおともだち、あつまれー!

9月8・9日

- 県民のみなさんが作る参加企画 パネル展示やシンポジウムをはじめ、大人も子どもも楽しく、ためになる企画が目白押しです。
- テント村大盤振る舞い 11:30~(両日とも先着500名)
8日スタミナとん汁 9日納涼そうめんを振る舞います!(協力:二本松市婦人団体連合会)
- 昔なつかしい紙しばい屋 子どもにとっては真新しく、大人には懐かしい紙しばい屋さん。子どもに戻った気分で、大人のみなさんも紙しばいを楽しみませんか?
- 未来館テント村 9:00~ 今年もやります屋台村。お祭りの雰囲気いっぱいです。

その他様々な企画・イベントをご用意しております。どうぞお越しください。
お問い合わせ:事業課 ☎0243-23-8304

未来館
NEWS

2007.8
No.28

編集・発行

「未来館NEWS」

財福島県青少年育成・男女共生推進機構
福島県男女共生センター~女と男の未来館~
〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
TEL (0243) 23-8301 FAX (0243) 23-8312
ホームページアドレス <http://www.f-miraikan.or.jp>
メールアドレス mirai@f-miraikan.or.jp



この広報誌は、古紙配合率100%再生紙を使用し、環境にやさしい大豆インキを使用しています。